



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	熊野純彦著『マルクス：資本論の思考』
Author(s)	麻生, 博之
Citation	哲学, 53, 95-103
Issue Date	2019-01-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75565
Type	departmental bulletin paper
File Information	53_t7.pdf



《書評》

熊野純彦著 『マルクス——資本論の思考』

（せりか書房、二〇一三年）

麻生 博之

いまから少し前、マルクスの思考のアクチュアリティをめぐる文脈で、故今村仁司は次のように述べていた。「二十世紀の巨大な事件がマルクスを忘れさせたのは、ある意味では余儀ないことであった。しかし他方では、いま新しくマルクスの書物を読もうとするひとびとにとっては、ひとつの積極的な意味もあった、二十世紀の政治主義的なイデオロギーがごっそりはげ落ちたことは、よいいな思惑をなくし、冷静に虚心坦懷にマルクスを読む条件を生み出したといえるからである」（『マルクス入門』ちくま新書、九頁）。じつさい、二〇世紀末から現在にいたるまで、国内外でさまざまなマルクス論が現われ、多様なマルクス再読の試みがなされてきた。そのような状況のなかで、しかし意外にも、マルクスの主著たる『資本論』そのものに、正面から、しかも全三巻を対象としてとりくんだ著作は、控え目にいっても多くはなかったように思われる。

本書『マルクス——資本論の思考』は、この意味において例外的にも、『資本論』そのものを全巻にわたって精読し、そのことを通じて同書におけるマルクスの思考の内実とアクチュアリティを明らかにしようとした、全七百頁を超える労作である。本書は、まず「序論」で本書における『資本論』読解の基本的視角の一端を示したうえで、

『資本論』全三巻、すなわち「第一巻 資本の生産過程」、「第二巻 資本の流通過程」、「第三巻 資本制的生産の総過程」の全体にわたり、多様に入りくんだマルクスの所論を順を追って整理し、論点ごとに具体的な、また現在のな諸事例に引きつけつつ、それぞれの要点を解き明かしている。そして各所で、一方ではマルクスの思考の、また『資本論』の形成史が、あるいは問題となる諸概念や論点にかんする西洋思想史、経済学史上の位置や意味が効果的に説かれ、他方では（この点はいくれぐれも特筆されておく必要があると思われるが）、今日までの、わけでも本邦における『資本論』の研究史、論争史が詳細に顧慮され、重要な論点ごとに研究と論争の積み重ねが仔細にフォローされている。

こうして本書は、まさに今日、『資本論』を読むということの意味と条件をくりかえし確認しつつ、あたかも『資本論』精読」といった題目での講義のように、『資本論』の全体を丹念に読み解き、そのことを通じて同書のコル心となす「思考」を浮かび上がらせている。このようにすぐれた『資本論』読解の著作である本書では、それゆえにまたマルクスの思想研究、また経済学史研究等にかかわる、啓発的で論争的なくつもの観点が随所に示されてもいる。そうした本書の評にとりくむべきここでは、とはいえ、本書の全体を詳しく紹介することはもちろん、それらの論争的な観点に立ち入ったかたちで論評を加えることも、限られた紙幅のゆえに、そしてそもそも論者の力量不足のために困難である。そこで、ここではおもに、本書の全体を貫く特徴的な視角・視点を論者なりに整理し、それらを概観することによって評に代えることとしたい。まずは、本書における『資本論』読解の骨格をなすいくつかの中心的な視角をとり出し、それぞれの要点を確認してみたい。

1 「哲学」としての『資本論』 マルクスの、わけでも『資本論』の思考とは、すぐれた意味で「哲学」である。

本論を説きおこすにあたって筆者がまず確認しておこうとするのは、この点である。むろんいうまでもなく、マルク

スの思考と哲学との関係をめぐってはさまざまとらえ方があり、長いあいだ議論が交わされてきた。しかし、ここで筆者が提示しているのは、いわばことがら自体にかかわる、ごくシンプルな視点である。

まず哲学的思考とは、「世界の総体」を、つまりは「みずからの生がその内部で可能となっている世界」の全体をとらえようとする営みであり、「世界のうちで―他者たちとともに―存在すること」(In der Weltsein-mit-den-Anderen)を総体としてとらえかえそうとする「こころみ」である(三一頁、三六頁)。そのような思考が十全なかたちで可能となるためには、しかし、そもそも「資本制」への問いが、すなわち、「世界」と人間の「生」を、あるいは「他者たちとともにある」存在のあり方を決定的に枠づけ、根底的に規定している資本制について問いかえしを行う作業が、いわば不可避の課題とならなければならない。まさにこの意味において、『資本論』の思考とはすぐれて哲学的な思考であることになる。「私たちが、現在もなおそのうちで生を紡いでいる世界は、基本的に資本制によって枠づけられている。みずからの生がその内部で可能となっている世界を総体としてとらえるためには、それゆえ資本制への問いを回避することができない」(三六頁)。

2 経済学批判 このように『資本論』をすぐれた哲学的営みとして位置づけると、その視角はまた、「経済学批判」という同書の元来のあり方を強く確認する視角とそのまま重なりあっている。哲学的思考としての「資本制への問い」に対して、「応えることが可能なのは、あるいは私たちが答えを手さぐりするときに、いままなお力づよい手ばかりを与えるものは、経済学ではなく『経済学批判』、マルクスがそう語った意味での Kritik der politischen Ökonomie であると思われる」(三二頁)。

同書を「批判」として際立たせるこの視角において意図されているのは、『資本論』の主題が一九世紀中葉までの主要な経済学(ポリテイカル・エコノミー)、とりわけ古典派経済学の所論とその前提をなす思考を内在的に批判する点にあったことについての強調であり、同時にまた、そうした同書をなお精密な経済学体系として彫琢しようとする

る立場からの距離である。「資本制をたんに自然現象として分析し、説明するところみ」としての経済学を批判し、あくまで「資本制を歴史的に位置づけ、相対化してゆく視点」こそが「経済学批判の体系」としての『資本論』の要なのであり（三二頁、五七九頁）、あるいは、理論的体系には収まりえない剰余としての「具体的な歴史過程を問題とする」その点に「経済学批判のロゴス」（五三三頁）がある。同書にとっては「経済学の外部」あるいは「市場の外部」へとつながる「開口部」（二四九頁）こそが決定的な意味をもつのである。

3 宗教批判 かくして、「マルクスを読むこと、とりわけ『資本論』全三巻を読みとくことは、現在の世界のなりたちを、その起源と歴史と現在とにおいて読みやぶることにほかならない」（一八頁）。そしてそれゆえに筆者はまた、同書の核心を「宗教批判」として規定する。「経済学批判体系としての『資本論』もまた、一箇の宗教批判であつた」（七〇六頁）。若きマルクスにとってヘーゲル学派における宗教批判は「地上の批判」へと転化されるべきものであつたが、とはいえ地上の批判、とりわけ「エコノミーの批判」は、それ自体がなおも「現世の神」の批判なのであり、つまりは「宗教の批判がいつさいの批判の前提なのである」（七〇七―七一一頁）。

こうした視角のもと、「宗教批判」という同書のあり方を端的に示すものとして焦点が当てられているのは、おもに二つの所論である。まず一方では、同書における周知の「フェティシズム」論がそれにあたる。まずは商品について語られるフェティシズム、すなわち商品が「価値形態」をその「自然形態」においてとり、それゆえ「関係のなかで生成する性格」が「存在のしかた」へと移行するという「置きかえ」（*Quidproquo*）（六五頁）は、いわば「自動的なフェティッシュ」としての利子生み資本の様態、つまり「社会関係が、一箇の事物すなわち貨幣の、それ自身に対する関係として完成されている」あり方（六五〇頁）にいたるまで、「資本制の神秘化過程」（六二五頁）をさまざまなかたちをとって貫いている。

他方で問題となるのは、資本制を支える「信用」ないし「信」、とりわけ「資本制の超越論的審級を制約する信用

制度」(七一頁)にかんする論点である。資本制の超越論的審級、つまり「その内部でのみ資本制総体の作動が可能となる」条件(七二頁)とは、すなわち「競争」を指す。銀行に代表される信用制度は、いわば「未確定な未来を先どりすること」(同頁)において、「競争戦のための強力な武器」となり、それゆえ競争という「当の超越論的条件が作動する制約」(六七三頁)となる。そしてそもそも、資本制の基底をなす「W—Gの過程」が「命がけの飛躍」として、すでにつねに無数の不確定性にさらされている」以上、「信用制度もしくは信用システムを裏打ちする信は資本制にとっていわば本源的な信であり、資本制それ自身と起源をおなじくする信である」(七一—七二三頁)。

4 時間論 経済学批判、宗教批判としての『資本論』というこうした視角は、さらにもう一つの視角、すなわち同書を一種の「時間論」として読み解こうとするそれと密接に結びあっている。本書を強く特色づけるこの視角において問題となるのは、いわば「不斷の生成」(三一四頁)という資本の本質的に時間的な成り立ちであり、とりわけ、資本がたえずその実現をはかる「時間のエコノミー」(「時間の節約」)の内実である。「資本はどのようなかたちで時間のエコノミーを貫徹するのか、時間のエコノミーを固有なしかたで実現することで、資本制は空間をいかに再編成し、世界をいかにつくり変えるにいたるのか。これが、マルクスの『資本論』が全三巻にわたって解きあかそうとする、枢要な問題系のすくなくともひとつにはかならない」(三〇頁)。

時間論というこのような視角から論究されることからは、ただし多岐にわたっている。たとえば、まずひとつには、資本制にとって一般的な傾向となる「時間による空間の絶滅」という事態がそれにあたる。とりわけ商品の流通、また運輸・交通にあつては、「距離つまり空間的な隔たり」は「時間的な差異」を介して、しかも同時にその時間的差異を「縮減」しつつ、「抹消される」のであり、この傾向は、資本が「地球全体をみずからの市場として獲得」するにいたるまで継続してゆくことだろう」(三三九—三四〇頁)。あるいは問題となるのはまた、いわば「資本の時間化作用」としての「時間の空間化」である。資本制下での生産の連続性を可能にするのは、(かつてのマニユファク

チュアにおけるように）単一の生産過程が分解され、空間的に並置されて「同時に」進行すること、すなわち単一な時間の流れの「複数化」によってである。そうした意味での時間の「空間化」は、しかも「とてつもない強度をとまなう時間のかたちを組織してゆく」のであり、それゆえ「時間そのものが、いわば濃度と強度を増してゆく」ことになる（二二二―二二五頁）。

そしてさらなる論点となるのは、貨幣の流通を契機とした時間の「等質化」という事態である。貨幣の流通により、しだいに諸商品の差異は抹消され、「商品世界あるいは商品空間」は均一化されてゆく。そのことは同時に、「商品が流通してゆく時間」そのものをも等質化し、そうしたものとして時間を無限に延長する（二〇八頁）。そしてこのような事態は、とりわけ宗教批判をめぐる論点と関連している。なぜなら、一方で信用、「信」は「未確定な未来」の先どりである以上、未来が「現在の延長」であること、未来と現在との等質性を前提とするからであり、他方でしかし、そうした「等質な時間の無限性」はじつは「仮象」にはかならず、それゆえに「信」には危機が内在しているからである。「等質な時間の無限性」という仮象が崩壊し、未来がもはや現在の延長上に立ちあらわれるのを止めるとき、時間の蝶番が外れて、信用の危機が生起し、恐慌が到来する」（一一四頁）。

以上、本書における『資本論』読解の骨格をなすいくつかの中心的視角についてその要点を確認してきた。本書では、いわば哲学的で批判的な関心に支えられたこれらの特徴的な視角にもとづきながら、『資本論』全三巻の議論が堅実に読み解かれ、「資本論の思考」が丹念に解き明かされてゆくことになる。本書にはただし、『資本論』そのものの性格づけと関連してくり出されてもいるそれらの視角とは別に（あるいはもう少しその背景に）、筆者が今日『資本論』を読むうえでおそらくは強く念頭においていると思われる、より基底的な、そしてアクチュアルな視点がいくつか存在している。ことがらとして重なりあうそれらの視点についても、少し急ぎ足で確認しておこう。

まずその一つとなるのは、自然にかかわる視点である。自然と労働ないし生産との関係という、マルクスの思考にかんして長く議論の対象ともなってきた論点について、筆者は、マルクスが産業主義者でも生産力主義者でもありえないことを強く確認する（二三九頁、他）。マルクスの視点からすれば、「労働そのものにおいても、「人間はつねに自然力に支えられて」いる」のであり、あるいは「あらゆる生産にとって基礎となるのは、自然そのものの豊かさである」（二五〇頁、五五四頁）。しかしそれにもかかわらず、資本制的生産は、世界の風景を大きく変容させ、自然のサイクル自体にさえ介入し変化を及ぼしてゆく。つまりは「永遠的な自然条件」すらも攪乱するのである」（二三九頁）。そのような自然と資本制との関係、いわば自然と「対立」する資本制のあり方（同頁、五八九頁）を強く意識し、その帰趨を問おうとする視点が、本書における『資本論』読解の一つの通底音となっている。

そしてそれゆえ第二に、本書では、いのちをめぐる視点が全体の基底を貫いてもいる。一方で筆者の視線がさし向けられているのは、資本制の下さまざまなかたちで犠牲となる人びとのいのちに対してである。いわば「利潤のため」の殺害」（四七〇頁）を惹き起こし、無数の「産業犠牲者」（二六五頁）を生みだし続けている資本制のエコノミーに対して、筆者はマルクスとともに、それを指弾する鋭い眼差しを向けている。他方でまた筆者の視線は、資本制によって侵蝕されるより広範な、そして基礎的ないのちのありように対して注がれている。筆者がくり返し述べるとおり、人間が「生きる」とは、つきつめれば「息を吸い、息を吐くこと」、「飲み、食うこと」であり（二四頁、五三一頁）、そのことは結局「自然の贈与」（一四六頁）なしにはありえない。しかし、いましがた確認したように、「世界における人間の生存の第一の条件」であるその自然に対し、資本制は破壊的に関係する。そうである以上、「いのちをめぐる基本的な」となみと資本制とは両立可能であるか」（四七二頁）、まさにそのことが問われなければならない。いのちをめぐるそのような視点が、本書では一貫して保持される基調の一つをなしているように思われる。

第三にしたがって、筆者の視線は、総じて資本制の暴力、とりわけその現在の暴力に注がれているといえる。マ

ルクスが「資本の本源の蓄積」の過程について憤怒を込めて詳述したとおり、資本制はその始原からむき出しの暴力を伴っていた。「資本制は暴力的に開始され、資本の始原には歴史の血痕がこびりついている」（二五四頁）。そうした「収奪の歴史」はしかし、少しも「過ぎ去った前史ではない」（二六八頁、二七八頁）。資本制の暴力は現在までたえず反復され、むしろ今日、グローバリズムと呼ばれる「地球規模の収奪」（六九一頁）となつて加速している。そうした暴力のありようをめぐる筆者は、さまざまな内外の現実を随所で拾い上げながら、それらがけつして過ぎ去つたものでも彼岸的なものでもなく、すぐれて現在のなことがらであることをくり返し指摘する。今日まで不斷に反復される「資本制それ自体の暴力性」（二七七頁）を問いただし、そのために『資本論』を読み解こうとするこうした視点が、本書ではその核心部に位置しているように思われる。

はじめに述べたとおり本書は、その論述の進め方としては、『資本論』の全体を、いくつかの特徴的な視角——同書を哲学として、それゆえ批判の営為として、そしてとくに時間論として読もうとする視角——に基づきつつ、また幾多のマルクス研究、思想史研究の成果を網羅的にフォローしながら、全三巻の所論にしたがつて丹念に読み解いてゆこうとするものである。そのような学的に手堅い論述の根底には、ただしいま急ぎ足で確認したように、実践的で現在の関心に裏打ちされた視点が貫かれている。その意味で本書は、アクチュアルな現実の諸課題をめぐる思考するそのために「資本論の思考」をつかみ出し、同時にあくまで、学としてすぐれて堅実かつ生産的なたちで『資本論』の全体を読み抜こうとする瞳目すべき一書である。今日の世界を前に、まさに現在、『資本論』を的確に読解するうえで、そしてマルクスとともに真摯に思考するうえで、本書を避けて通ることはおそらく不可能であるといえよう。

このような本書について語っておくべきことはむろん多いが、残された紙幅が尽きつつあるなかで、最後にひと言

だけ率直な印象を書きとめておきたい。くり返しになるが、本書は「資本論の思考」を同書全三巻の所論にそくして辿りなおすことを課題としている。その点からすれば当然のことながら、本書はなにか特定の主題を設定し、それにそくして『資本論』、またマルクスの思考を再構成しようとするものではない。しかし、以上に粗描したいくつかの特徴的な視角や視点にかかわるものをはじめとして、本書には独立したかたちでさらに展開されるべき、刺激的で興味深い論点が数多く存在している。なかでも、時間論としての『資本論』、また自然といのちに対する資本制の関係といった論点は、そのものとして主題化され、まとまったかたちで詳論されることが強く期待されるように思われる。たとえばそのようなかたちで、筆者によるさらなるマルクス論が展開されることを願いつつ、この拙い評を閉じておきたい。〔二〇一七年四月擱筆〕

（せりか書房、二〇一三年、七三九頁）